

## 仮設住宅の継続的な支援と実践

### ・イベントについて

8月3日・4日の2日間で岩手県釜石市の甲子仮設を訪問しました。私にとって今回が初めての活動となりました。今回は、仮設の方々に楽しんでいただけるイベントを企画するというので、仮設の方々やボランティアの方々にもたくさんご協力いただき、仮設のコミュニティ支援として、お祭りを開くことができました。イベントの内容がマンネリ化してきているということで、工夫のある新しい企画をしようと、私たちの中で案を出し合いました。イベントの屋台などの主な内容は、流しそうめんや射的、たこ焼きやかき氷などです。印象的だったのは流しそうめん、変わり種のミニトマトやブルーベリーなどを流すととても盛り上がり、笑いが絶えませんでした。また、チョコフォンデュができるチョコファウンテンという機械を持参し、お菓子やバナナなどにつけて食べられるようにしました。企画をしたときは、年配の方が多き仮設では、若者に人気のチョコフォンデュなどは受けるのかという心配もありましたが、これがとても評判がよく、「初めて見た」「おいしくて楽しい」と笑顔になってもらうことができとても嬉しかったです。次に、仮設の皆さんと大学生の合唱、私たち大学生の釜石よさを披露しました。合唱が始まるまで、仮設の皆さんが何度も合唱の練習をしてくださっていた光景が心に残っています。合唱は仮設の方々と学生の一体感があり、とても温かい気持ちになりました。全員で参加できて、一緒に楽しむことができたと思ったので、実践することができてとてもよかったです。私たちが披露した釜石よさは、浴衣で行いました。浴衣を見る機会が少ないということもあり、お祭りの雰囲気も出て、学生の浴衣も喜んでいただけました。お祭りはどの企画も、とても盛り上がるものとなったと思います。今回私たちは、イベントの企画のマンネリ化を防ぐため、今までとは違った企画を目指してさまざまな案を出しました。そしてたくさんの協力があり、ほとんどの企画を実践することができました。今回の活動で、仮設の皆さんに楽しんでもらったこと、喜んでもらったことなど、今後も活かしていきたいことや次回は改善すべきことなどがわかったので、次の企画がより楽しんでもらえるものとなり、継続的なコミュニティ形成の支援につながるようにしていきたいです。

### ・仮設住宅を訪れて

私は仮設に到着してから、イベントの呼びかけのために住民の方と一緒に一軒一軒声を掛けに回りました。平日だったこともあり、留守のお家も多かったのですが、回ってみて感じたことは、子どもがほとんどいないということと、年配の方が多きということでした。また、空室が目立っていたことも印象的でした。一緒に回ってくださった方は、この仮設の住民一人一人の普段の生活などのことをよく把握していて、一人暮らしの高齢者が多き中で、このようなコミュニティが形成されていることは、とても重要なことだと感じました。夜に、仮設に住む方にゆっくり話を聞く時間がありました。震災について、あまり思い出すような会話はしないほうがいいのではないかと感じていましたが、住民の方からその時の状況を話してくださいました。私は震災について、テレビやニュースでの情報しかなく、被災地の方の声で実際に話を聞いて、こんなにも恐ろしいことが現実起こったのだと、改めて実感しました。仮設の方々は明るい方ばかりでした。しかし、仮設で生活

している人は、震災により家を失ったり、家族を失ったり、何かを失ってここで生活しています。震災から4年が経ち、被災地の方が一番恐れていることは、忘れられていくことだという言葉がとても印象に残りました。今は、テレビやニュースで前ほど被災地について取り上げられていません。しかし、まだ仮設での生活を強いられている人がたくさんいます。私たちは被災地の今をもっともっと伝えていくべきだと強く感じました。

現在釜石市では、東日本大震災から4年が経ち、復興公営住宅などへの転居が進んでいるようです。ニュースなどで私がよく耳にしていたのは、仮設住宅での高齢者の一人暮らしによる孤独死などの問題です。こういった問題を防ぐためには、仮設住宅の中のコミュニティを豊かにすることです。私たちのような外の人々が、イベントなどさまざまな工夫をして、多くの人に参加してもらえるように企画し、そのコミュニティづくりの力になればいいなと思いました。

#### ・感想

私は今回の活動を通して、釜石市の方々と関わっていく中で、昔から知っていたような、地元のような温かさを感じました。テレビの画面を通して見ていた仮設住宅の姿を、初めて目の当たりにしました。今回出会った方々と話をしている、私の住む地域の人とあまり変わらなくて、似ているなと感じました。私たちと同じように、普通に生活を送っていた人たちが、3月11日に襲った大津波に遭い、突然今までの生活を奪われてしまったのだということを実感し、悔しくてたまらない気持ちになりました。この震災と被害を伝えて、絶対に忘れてはいけないと感じました。支援の形は様々ですが、私たちにできることは何だろうと考えました。今回の活動を通して私たち東京の学生にできること、力になれることを改めて考えるきっかけになりました。現在私たちが行っているのが、「かまたま新聞」という新聞を毎月配るという活動です。私はまだこの活動に参加したばかりで、この新聞がどのような役割を果たしているのか、あまり深く考えていませんでした。しかし、この活動を通して被災地の皆さんと繋がっていくことができ、情報を提供することができます。毎月作成するこの新聞を楽しみにしてもらったり、少しでも喜んでもらったりできるような、私たちにできる支援にこれからも携わっていきたいです。こういった活動を通して、東京の学生と仮設住宅の方々がつながっていることがとても大切だと感じました。今回の活動で、仮設住宅のもみなさんと関わりお話をすることで、みなさんの明るさと元気に、こちらがたくさんのパワーをもらった気がします。次は私からもっと積極的にコミュニケーションをとり、笑顔いっぱいの企画ができればいいなと思います。